
緋弾のARIA ~ Another Story

蒼参

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜Another Story

【Nコード】

N7679W

【作者名】

蒼参

【あらすじ】

武偵を育成する東京武偵高校に通う日水日向。その日、友人の遠山キンジと揃って自転車通学をしていたのだが……。キンジ以外にHSSの能力を持っている主人公の物語。

ブログ上 危険な通学（前書き）

これが初投稿の小説でして、文章も変かもです。
更新も少しずつしていきますので、間が空いたりしたらすいません。

プロローグ上 危険な通学

さて、冒頭から少しおかしな質問をしようか。

空から女の子が降ってくると思うか？

雨でもなく、雪でもなく、真正正銘の女の子だ。つまり、非日常の始まり面倒事の始まりってこと。物語の冒頭部分に相応しい場面そして、その少女を見つけた主人公は事件に巻き込まれ、少女を守るために闘うんだ。闘う相手は何でもいい、悪の組織でも教師でも大人でも少女に害を与える奴らは倒さなければならぬ。それが、悲しいかな、主人公のつとめなのだ。

俺、日水日向はそんな主人公には同情してしまう。いくら降ってきた少女の第一発見者だからって、面倒事に巻き込まれるのは理不尽じゃないか？

だが、物語は都合のいいことに主人公はその少女に恋をするのだ。恋をした途端、もはや同情の余地もなくなっちまう。だって、好きな女を守るのは男として当然の義務だろ？

まあ、結局のところ何が言いたいかというと『空から降ってきた女の子には注意しろ』って話だな。常に上を向いて歩こうぜ、時々前なんか見ながらよ。

「うえ……眠みい……」

けたたましいとも呼べる目覚まし時計の音で目覚めた俺は、うっすらと開けた目で枕の下に置いてある携帯を取り出した。時間は七時半過ぎ。ちなみに俺を起こしてくれた目覚ましさんは起きると同時にどっかに放り投げて行方不明だ。アラームが止まってるってことは、当たり所が悪くて壊れたか、当たり所が良くてボタンを丁度押すような形で落ちたか。まあ、どうせ前者だろう。ガシャンッって嫌な音したし、そんな後者みたいな都合がいいのなんてそうそうねえし。

今月一回目。そりゃ、今日が四月一日だから。先月は何個壊した
だろうか……最終的には諦めて、隣の部屋に住んでいるキンジに起
こしに来てもらっていたり、そのまま遅刻したりと、改めて思い返
せば教師と友人に迷惑をかけているダメ人間だな。

「女嫌いで楽しいところ取りのダメ人間か」

高校に入学してから同じ学科の皆につけられた二つのあだ名と、
日頃から自分自身に思っていることを並べて呟きながら、俺はさっ
きまで着ていた服を脱ぎ散らかして高校の制服に着替える。シャツ
を着ながら、ついでに朝食の準備を。

台所にあつた食パンを二枚、棚から取り出した皿に置く。食パン
二枚じゃ味気ないので冷蔵庫から出してきたハムを間に挟み、コッ
プにコーヒートを淹れて、これで日水ヒナタ風手抜き朝食の出来上が
りだ。この朝食とはかれこれ五年の付き合いである。たまに焼いた
り揚げたりするだけで特にメニューとしては変わりもなくの五年間。
自分でも長い付き合いだとは思うが、これが一番早く食べれるから
な。五分以内で食べ終わる。

「ごちそうさん」と

洗い場に食器を置いて、俺は通学に欠かせないモノとして二丁の
拳銃を腰のホルスターに入れて、ナイフも制服ジャケットの裏側ポ
ケットに忍び込ませた。

普通の高校生が持たないモノ、拳銃とナイフ。

だが、この世界では少々特殊な職業がある。年々、凶悪化する犯罪
に対抗する為に生み出され、国家資格や逮捕権を持ち、武装を許可
されている組織。それが「武装探偵」、略して武偵だ。
そして俺は、その武偵を育成する東京武偵高校に通っている。ま、
普通の高校生ではない。この武器を携帯するのも校則できっちり
決められていることだ。

拳銃はS & amp; W M29とデザートイーグル。ナイフはフ
アイディングダマスカスだ。全て昔から馴染んでいる武器ばかりで、
DEなんて何年使ってるだろうかな。十年以上か？

ホルスターの上から軽くDEを叩く。銃弾の数は昨日二丁とも確認したから大丈夫だ。最終チェックを済ませた俺は置きっぱなしの制服ジャケットも羽織って、玄関脇に昨日帰ってからそのままの鞆を持って玄関を開けた。

朝日の眩しさに早速嫌気がさした俺の耳に、ガチャリとお隣さんの玄関が開く音が聞こえてくる。

「よお、キンジ」

「……おう」

非常に不機嫌そうに隣人の遠山キンジは答えた。

遠山キンジ、入学して数週間で親友になったヤツだ。こいつとはとある理由のお陰で唯一腹を割って話せ、同じ悩みを共に持っている。どうした？ 朝からすげえ機嫌悪そうだぞ？

朝日に目を細めていたキンジは、深々と溜息をついて

「白雪がな。朝から来てたんだよ」

「あー、白雪ね」

白雪。本名は星伽白雪。聞くところによると星伽神社の巫女を勤めているらしく、ここの武偵校でも専門学科は超能力捜査研究科（SSR）通称S研に所属している。見た目も性格も日本を誇る女性像、大和撫子美少女なのだが……どうもキンジに恋しているようでキンジの身の回りの世話を率先してやってくれているのだ。

ただ、困ったことにキンジはいくら幼馴染の白雪であろうと“女子”にはとことん距離を置きたがるので、白雪のお世話はキンジにとってはありがた迷惑っばいが。

「春なのに実のらねえ恋もあるもんだ」

あの様子からして随分昔からの恋だろう。白雪の恋は実るのかな……キンジは鈍感だからな。普通の人が気が付く程の好意さえも気が付かない。

「けど、白雪って昨日帰ってきたばっかだろ？ そんですぐまた恐山に合宿って聞いたけど」

「あいつが合宿に行ってるあいだは、メールの送信数が凄いで。百

も雄に越す」

うんざりとした表情でキンジは、制服のネクタイを緩める。俺は最初からネクタイなど付けてもいないので、代わりにボタンを一つ外した。

今年の春は暑いな。早く衣替えのシーズンになってほしい。

「それは、どうも御愁傷様で。……つと、そろそろ急がねえとバスに間にあわんぞ」

話を一区切りして、時計を見ると時間はすでに七時五十五分。

こりゃ、もう間に合う以前の問題だ。ここからバス停まで五分はかかる。五十八分のバスは諦めたほうがいいな。

「久しぶりにチャリで行くとするか。ヒナタもそうするか？」

「そうだな。通学路を眺めながらのチャリ通学もいいもんだし」

頷きながら、俺は一年の頃よくやってきたチャリ通を思い出す。

……途中で寄り道ばかりのチャリ通だった。通学途中だったのに、なぜかアルバイトに勤しんでいたこともあったり、暴走車にはねられたりと（もちろん、受け身をとってケガを回避した俺はそのままその車に容赦なく発砲した）なかなかデンジャラスだ。

ま、今日はキンジも一緒なんで間違っても、寄り道やらデンジャラスな状況にはならんと思うけど。いや、心からそう願いたい。

「なあ、俺らってなんか悪いことしたかね？」

チャリを一生懸命こぐキンジの背中に俺は問いかける。

「知るかよ！ いいから黙って逃げるぞ！」

振り返らずにキンジは怒鳴った。チャリ通には似合わぬこの会話。そして、チャリ通に似合わぬ……

「チャリを降りやがったり 減速 させやがると 爆発しやがります」

この人工音声による脅迫。爆発なんて物騒な言葉つきだ。で、俺らを監視するかのごとく丁度隣を並走するセグウェイ+UZIウージーの銃口。たしかUZIってさ、秒間十発の九ミリパラベラム弾をぶっ

放す、イスラエル製のサブマシンガンである。一度だけ任務で使ったことがあるから威力は百も承知だ。

「ちくしょう！俺ら武偵だけどさ。こんな危ねえ通学なんて人生初だよ！」

理不尽な通学に対する文句を叫んで、チャリをこぐ足にさらに力を加える。まったく俺が通学前に願ったことは、神様に無視されちまったんだな。

俺って神様に嫌われてんのかな？雲一つない青空を見上げ、俺は普通であるべき通学路がこんな危険なモノに変わった経緯をぼんやりと思いつく……

「キンジ。俺に一つ提案があるんだが聞いてくれるか？」

並んでチャリをこぐキンジと話しながら、俺は学校へと進んでいく。

「何だ？」

退屈気に通学路の風景を眺めていたキンジの視線が俺へと移った。確かに、ここの通学路は特に変わり映えもしないからな。時々、店が新しくできるだけだ。

「このまま、サボらねえか？」

「却下だ。始業式ぐらいはちゃんと出る」

キンジは容赦なく却下すると、あくびをした。

「面倒だ」

チャリから両手を離し、俺は伸びをする。学校の堅苦しい行事は昔から苦手だ。なんというか…雰囲気が特に。

それに、武偵校の場合だと始業式後に始業式以上の面倒な授業がある。始業式ぐらいショートカットで昼休みまでとかにするべきだろ。

他の一般校は普通はそうだ。遠くに見える東京のビル群を恨めしそうに見つめる。あちら側の人は拳銃の撃ち合い…そもそも、拳銃じたい持ったことがないだろう。そんな生活は多少は羨ましくもある。

るが、もう俺は武偵でしか生きれない。

ってか、サラリーマンになって普通に暮らす俺など想像できない光景だ。ただ、俺のお隣でチャリをこいでいるキンジは、その普通の人になりたいらしいけどさ。

予定通りならキンジは来年の春には、この武偵校からいなくなる。武偵ですらなくなってしまう。

寂しいが、キンジがそうしたいのなら何も言うまい。金一さんのこともあつての判断だ。

「キンジ」

体育館へ向けてチャリをターンさせたキンジの背中を叩く。

「いてっ……いきなり何すんだ」

振り返ったキンジへ、俺が次の言葉を出そうと口を開いた時。

「その チャリには 爆弾 が 仕掛けて ありやがります」

奇妙な人工音声が聞こえてきた。……何でだろうか非常に嫌な予感がする。ここまでの日常そのものが壊れるような……。

俺は額に手を置き、ゆっくりと深呼吸をした。まずは落ち着いて状況分析だ。えっと、聞こえてきた音声は……ネットで人気のボーカロイドの声だな。で、どこから聞こえてきたのかね？

注意深く周りを見渡して発見した物体。俺らの隣をいつのまにやら並走している、タイヤ付きのまるでカカシのようなモノ。あれはセグウェイだな。昔、一度だけ見たことがる。本来人が乗るべき場所には一基の自動銃座とスピーカー。

……銃口が俺らに向いているのは気のせいだろうか。それにさっきの“爆弾”って言葉……チャリをさぐってみるとサドルの裏にプラスチック爆弾がついていた。大きさから考えると、こんなチャリなんぞ楽勝で消し飛ばせるぐらいだ。

早くも現実逃避がしたくなってきた。

「助けを 求めては いけません。ケータイを 使用した場合も爆発 しゃがります」

見るとズボンのポケットを探っている最中だったキンジが、苦々

しい顔で手を止める。なんてこった。実行犯からも監視されてるのか。

「ヒナタ！ どうする？」

「とりあえず……」

俺はセグウェイから目を逸らし、前を睨みつけた。

「逃げるぞ！」

プロローグ上 危険な通学（後書き）

初投稿のくせに長くなってすいません。プロローグは上・中・下あります。

後にはようやくアリアの登場。なるべく原作通りを目標に頑張ります。

・主人公

日水日向 カミナ ヒナタ

東京武偵高校2年A組所属。キンジとは苦労を共にする親友。学科は探偵科。使用武器はDEとS&W M29、ナイフはフアイティングダマスカス。

キンジのヒステリアスモードに似たような能力を持っているが、どこでその能力に目覚めたのか、なぜその能力が使えるのかは不明。だが、キンジとは違いHSSの最中は目の色が黒から薄い灰色に変わる。

幼少時から、父親から武術や剣術や銃の扱いなど、幅広い範囲の戦闘術は叩きまれていたが、武偵ランクEにいる。歳の離れた兄。義妹がいる。兄は、ここ数年音信不通。親戚内では断トツで評判が悪い。

“今を大切に”をモットーに日々生活しているからか、イベントごとには絶対に首を突っ込む。だが、面倒くさがりなトコモもあり、学校の堅苦しい行事にはあまり参加しない。強襲科では「楽しいどころ取り」と名付けられていた。

結構、仲間意識は強く一度友達になった人は絶対に守る。キンジに対して向けられる好意には敏感でたまにからかうが、自分に対して向けられる好意にはとことん気が付かない鈍感さ。

容姿は友人曰く「黙ってりゃイイ男」。切れ長の黒眼にボサボサの黒髪。ヒナタ本人は自分の容姿をあまり良く思っておらず「不良顔」

だと言っている。

プロローグ 少女と拳銃とファンシーと（前書き）

プロローグ中です。

長くなってすいません。

プロローグ中 少女と拳銃とファンシーと

はい、回想終わり。

「諦めるな、武偵は決して諦めるな。キンジ、第二グラウンドに行くぞ！ あそこなら誰もいない」

武偵の心得十条を気合いを入れる為に呟く。まさかこんな状況で使うとは、思っていなかった。ちなみに遅刻しそうになったときによく使っている。

第二グラウンドには予想通り誰もいなかった。まあ、普通だったら生徒や教師は全員体育館に行っているからな。

少しは俺達と同じような境遇に巻き込まれている奴がいるかと、期待はしていたんだが。そりゃ、チャリジャックなんて珍しいことさ。俺、武偵の授業でも聞いたことねえし。

「策は何かでできたか？」

「いや、全く。さっきから必死で考えてんだけどよ。キンジは？」
悔しそうに首を振るキンジ。こんな時だからこそ俺達は冷静になれない。

俺一人なら木にでもぶら下がってやり過ごすことはできる。だが、キンジの爆弾処理の仕方が思い浮かばない。それに、俺がセグウェイの圈に勝手出てもキンジなら認めてくれないだろう。

「何とかし……」

突然キンジの声が途切れた。何があつたのか思考を中断させてキンジを見れば、目を丸くしてある所を見つめている。

キンジの視線を追って、俺も目を丸くした。それは、この状況でも十分にありえないのに、状況以上にありえない光景。

グラウンド近くに建っている七階建てのマンション。あそこは武偵校の女子寮だ。

その屋上の丁度縁に女の子が立っていた。武偵校のセーラー服を着たピンク色の長いツインテールを持つ少女。彼女の立ち姿は、颯

爽と、そんな言葉が似合っている。

って、何で武偵校の生徒がそんなとこにいるんだ？ もう始業式は始まっているのに。

彼女はチラツと俺達を追うセグウェイに視線を向けると

「……なっ!？」

屋上から飛び降りた。

「飛び降りた!？」

驚きのあまりキンジはペダルを踏み外しかけている。俺も一瞬だけ啞然としてこぐのを止めかけていた。

それほど、彼女の行動はイレギュラーだった。いきなり飛び降りたんだ。驚くしかないだろ。

けれど、俺達は甘かった。まあ、しょうがない話だ。彼女の型破りさ、無茶苦茶さ。そんな彼女らしさをまだ全く知らなかったんだからな。

長いツインテールを風になびかせて落下していた彼女は、途中でパラグライダーを空へと広げる。そして、そのまま揃って目を丸くしている俺達に向かって下降してきた。

「おいおい……」

思わず頬が強張る。まさか、このまま突っ込んでくるんじゃないだろな。

「バツ、バカ! 来るな! この自転車には爆弾が」

こちらに向かってくる彼女の速度が速く、キンジの叫び声はもはや間に合わない。

「ほらそのバカ共! さっさと頭を下げなさいよ!」

空中で鮮やかに方向転換した彼女は、初対面の俺達をいきなりバカ呼ばわりして、左右の太もものホルスターから二丁の拳銃を抜く。初対面でバカ呼ばわりする女なんてはじめて見た。

それに、あの不安定な状態で

パンツ！！

俺達をしつこく追っていたセグウェイを正確に撃ち抜くなんて奴もはじめてだ。二丁の大型拳銃での水平撃ち。凄い生徒もいるもんだ。

「すげえな……」

セグウェイを撃つても俺らの尻の下には、爆弾があることを忘れかける。

くるつと二つの拳銃を回してホルスターにおさめた彼女は、器用に体全体を使って俺達の頭上へと移動した。顔を見合わせた後、彼女を巻き込まないようにキンジと逃げるかのように第二グラウンドを走る。

「く、来るなって言ってるんだろ！ この自転車には爆弾が仕掛けられてる！ 減速すると爆発するんだ！ お。お前も巻き込まれるぞ！」

「バカっ！」

キンジを無視した彼女の白いスニーカーが、キンジ、俺の順番でカ一杯頭を踏みつけた。

「武偵憲章第一条にあるでしょ！ 『仲間を信じ、仲間を助けよ』
いくわよ！」

俺達は痛さも忘れて、彼女の行動から目が離せない。

いや、『いくわよ！』って……いったいどうすんだよ。彼女にはこの状況を打破する最高の秘策でもあるのか？ あるんだろうな、あんな自信満々の顔なら。

そのまま綺麗な操作方法で彼女はパラグライダーを意のままに操り、俺達の進行方向でさっきまで手を入れていた場所に足をかけて逆さ吊りの状態になった。

「マジかよ……」

俺達は揃って同じ呟きを漏らす。

「ほらバカ共っ！ どっちでもいいから全力でこぐっ！」

命令口調で叫ぶと彼女の両手が広げられた。

「キンジっ！」

お前が行けっ！ と叫ぼうとした瞬間、キンジが俺の前から姿を消す。いや、正しく言えば方向を換えて右に逸れただけ。たったそれだけの動作で、俺が行くことが確定した。

「持ち堪えるキンジ！　すぐに助ける」

覚悟を決めて俺は全ての力を足に加え、最後の全速力で彼女へと近づく。なんだか、サーカスの空中ブランコみたいだな。違いはコレが命懸けの行動であること。少しでもミスすれば彼女もろともドカンだ。

「っ！」

彼女に突っ込む直前に俺はハンドルから両手を離す。

呼吸を整える為に息を吸った直後、俺と彼女は抱き合った。ただし、上下互いの状態で。そのまま、自分の体が浮くのを感じると同時に、余計な甘い女子特有の匂いまで感じてしまう。クチナシの甘い香りが、息苦しいほどに酸素と混ざる。

ドガアアアアン！！！！

閃光で目を瞑り、轟音が聞こえると爆風が俺達を襲う。まったくもってシャレにならないチャリジャックだ。俺みたいな普通の武偵にはもつたないぜ。

そのまま、爆発の影響で起こった熱風に吹き飛ばされて開きっぱなしの体育館倉庫に容赦なく突っ込んだ。

「……………痛つてえ」

受け身をとる暇もなく突っ込んだので、体のあちこちがちが痛い。俺は痛さに顔をしかめて目を開けた。

……………ん？　俺の視界一杯に広がる妙にファンシーなものは何だろうか。なぜか、またも嫌な予感を感じてしまった。俺はゆっくりと目を閉じて、現状を思い出す。

キンジと共になぜか追われていて、たしか……………俺の記憶が確かなら……………恐る恐る視線を上げてみた。

まず、一番始めに見えてきたのがピンク色の髪。そして、首を何とかあげて見えたのは可愛いとしか表現できない女の子の顔。長いまつ毛、うす桃色の小さな唇、俺の視界に入る全ての顔のパーツが女の子らしさを表している。

俺は妙なコトを考える前に急いで目を閉じた。そうでもせんと、アレになってしまふ。首を横に振り、首を元の状態へと戻してから目を開けた。

ってか、この目の前のファンシーって。この少女の体勢から考えると、丁度胸の辺りだから…

「……な、なあっ！」

ファンシーの正体を理解してしまった俺は焦って大声が出てしまふ。何で、深く考えてしまったんだ？ そんなのどうでもいいことじゃねえか！ 目の前がファンシーであろうがなかるうが、この場合は冷静に対処すべきだったのだ。

ああ、ダメだ。こりゃ、アウトだ。体中の血液が普段よりも熱くなっていることが解る。俺は、こんな場所で、こんな状況で、少女の下着を見ただけでなってしまったらしい。

俺と遠山家を持つ特殊な能力、ヒステリアモードへと。

ヒステリア・サヴァン・シンドローム。通称、ヒステリアモード。略称HSS。遠山家代々伝わる体質らしく、なぜ遠山家でない日水家の俺がこの体質なのかは解らない。どうしても他人からは「女嫌い」と言われる原因であり、俺とキンジの悩みの種だ。ヒステリアモードの発生条件は、まあ簡単に言えば、異性で性的に興奮することとなってしまう。ちなみに俺のヒステリアモードは発生条件が本家とは少しだけ違う。性的に興奮するだけでなく、異性を強く意識してしまったときにも不意打ち気味になる。キンジと比べると俺の方が発生条件が軽い。

今回は後者のパターンか。

さっきとはうって変わって冷静になる頭。とりあえず、この俺にもたれかかって気絶している勇敢な少女をなるべく優しく横たわら

せる。クールに優しく、どうしてもなってしまうヒステリアモードの困ったとこだ。

「さて……キンジ、無事でいろよ」

ホルスターからDEを抜いて俺は、体育館倉庫から走って出た。右、左、視線を辺りに彷徨わせてキンジの姿を捜す。

いた。前方百メートルほど先。俺に背を向けてチャリをこいでいる。無駄にここのグラウンドがでかくて良かったな。爆風でバランスも崩れてないし。

「キンジ！俺の二十メートル先を横切ってくれ！」

振りむいたキンジが大きく頷くのが解った。後は、タイミングとキンジのこぐ速さにかけるしかねえな。俺はDEをかまえて叫ぶ。

「俺が撃ったあとすぐに、その場を全速力だして離れる！」

俺がやるうとしてしていることは、サドルにとりつけてある爆弾を初弾で取り外し、次の銃弾でその外れた爆弾をはじいてキンジから遠ざける。普段の俺には絶対にできない超人的なことだが、ヒステリア状態ならできるだろう。

ヒステリアモードの効果は、一時的に思考力や判断力、反射神経までも30倍に向上する。一時的なスーパーマンになれるわけだ。だが、その力にも欠点はある。天下無敵のスーパーマンなどいない。「行くぞっ！ヒナタ」

キンジが俺の指定通りに横切った。

パンツ！パンツ！

俺が使っているDEは撃った後の反動が大きい。小さい頃から使っている拳銃でなれていても、油断すると手が痺れて撃てなくなる。小さい頃はそれでよく肩を外していたもんな。それに比べりゃ手の痺れぐらいマシか。

そんなことを思いながら、俺はその場からなるべく離れた所に伏せる。

ドガアアアアン！！！！

俺のと同タイプの爆弾か。やっぱり、何か釈然としないな。

それに手口がまるで『武偵殺し』。だが、武偵殺しは捕まっただけで、だとしたら武偵殺しの模倣犯か。いやいや、さらに訳が解らなくなってきた。

このチャリジャックが武偵殺しの模倣犯の犯行としよう。すると不明な点が残る。一つ目、なぜ武偵殺しの模倣犯が出てきたのか。二つ目、なぜ俺達の自転車に仕掛けられていたのか。

一つ目は武偵を恨む奴が勝手に武偵殺し風に襲ってきただけ。二つ目は……解らない。俺達はHSSという反則な体質を持っているが、そのことを知る人は少ない。この武偵校の人も絶対に知らないはずだ。そもそも、俺達は傍から見たら一般的な生徒。しかも武偵ランクEの。武偵ランクはS〜Eまである。俺達はその一番下のランクだ。そんな襲つても意味が全くない奴に爆弾なんて、資源の無駄遣いだな。

土煙が晴れ、俺は倒れているキンジの元へと駆け寄った。

「キンジ。立てるか？」

「ああ。少し態勢を崩してこけただけだ。それよりも、ヒナタ」

体に付いている砂をはたいて立ちあがったキンジが訝しげに俺の顔を覗き込む。俺の目の色が少し薄くなっていることに気が付いたんだな。

「ヒステリアモードになっているよな？ 何があった」

「軽い方だな。ただのアクシデントと言うか……」

本当にただのアクシデントだからどう説明すればいいのか。

「とりあえず、体育館倉庫に行くか。助けてくれた子にも礼を言っとかないといけないしさ」

少しの沈黙後、俺は誤魔化すように体育館倉庫に向かって歩き出した。自分がヒステリアモードになった原因なんて、あまり話したくない話題だ。キンジ、お前も同じなんだから察してくれ。この微妙な罪悪感とか、自己嫌悪とか。

ブログ中 少女と拳銃とファンシーと（後書き）

すいません。

書きすすんでいくうちにどんどん長くなって…当初の予定の前後でなく上・中・下とブログを多くすることになりました。下は、早めに投稿するつもりなので。

プログラグ下 誤解。そして始まり(前書き)

やっとプログラグ終了です。

プロローグ下 誤解。そして始まり

「で、まだ起きてないんだが」

体育館倉庫に戻ると、少女はまだ気絶していた。吹っ飛ばされた時にどこかぶつけたか。もしくはそのままグッスリ寝ちゃってるのかね。ま、寝るのはないな。常識的考えたら。

「おい、起きろよ」

ため息を吐いてキンジが、遠慮がちに少女の体を揺さぶる。『神崎・H・アリア』胸元に付けてある名札も揺れる。

それにしても小さい少女だ。このアリアって子は多分、中学生だな。いや、下手したら小学生？ インターンで入ってきた武偵か。さっきの拳銃の扱いとか、将来有望な小学生さんなこった。ってか、小学生に助けられたってすげえ情けない話だ。

「ん……ん？」

薄くアリアの目が開いた。数秒間の沈黙後、アリアの目はほとんど大きく開いていく。紅い瞳が、キンジ、俺の順番にとらえた。

そして出てきた言葉が

「……………へ……………へ……………」

「……………」

顔を見合わせる俺達。

「ヘンタイ ……」

鼻にかかった幼い声。こつこつをアニメ声って言うのか？ その可愛らしい外見と妙に合う声が、体育館倉庫に響き渡った。

「ぐえっ……………」

意識が戻り、すっかり覚醒モードのアリアにお腹を蹴られたキンジが尻もちをつく。

あ、今気が付いたんだけどさ。アリアのスカートが少しだけ捲れている。キンジも俺も気が付かないぐらいの“少し”。

「さっ、さささっ、サイッテー！！！」

捲れたスカートを手をパツと直したアリアは、未だに尻もちをついているキンジの頭に拳を下ろした。

ポコポコ パカポコパカ…全然痛くなさそうな殴り方だな。むしろ、殴ってるじゃなくてお父さんにする肩叩きレベル。

「おっ、おい、やつ、やめろ」

そのままこの楽しい光景を見ていたかったのだが

「ヒ、ヒナタ！ 見ていないで助けるよ！！ ってか、誤解をといてくれ！！」

キンジの声で、アリアの真つ赤な顔が俺に向けられる。おっ、ターゲットが変更するのかね。

「このチカン共！ 恩知らず！ 人でなし！」

……誤解のオンパレードだな。

「誤解、事故…だよ。アリア」

ヒステリアモードの俺は、普段では考えられないほど女の子には優しい。考えていることは、普段の俺まんまなんだが。

動きさえもヒステリアモードが支配する。女の子相手に優しく微笑むなんてよくできるな、ヒステリアモードの俺。

「ご、誤解っ！？ れっきとした事実じゃない！！」

キンジをもう一度蹴ってから、俺の前に立つアリア。……ちつさ。小さいと思っていたが、ここまでだったなんて。こりゃ、小学生確定だ。

「……ん」

アリアの文句に紛れて、何か聞こえる。車輪と地面が接触している微かな音だ。……やれやれ。またも面倒事が来てしまった。

「後で弁明はきちんとするよ。キンジ、跳び箱の裏に！！」

「あっ、ちよつと！！」

今まさに殴りかかろうとしていたアリアの手を握り、キンジの横へと移動する。

ガガガガンツ！！

俺が跳び箱裏に隠れたと同時に轟音が俺達を襲う。あれだけじゃ

なく援軍のセグウェイまで送りつけてくる犯人の思惑が解らない。つたく、狙われてるのは誰だ。それよりも俺が常々疑問に思っていたことがある。なぜに跳び箱が防弾製なのかと。体育の時間ぐらい拳銃から離れるよと。なるほど、こういうときのためだったんだな。納得、納得。疑問を解消した俺は、ホルスターからデザートイーグルを抜く。

「うっ！ まだいたのねっ！」

鋭い目で跳び箱の隙間を覗いて、アリアはスカートの中から拳銃を二丁取り出した。コルト・ガバメントのステンレスモデルとスチールモデルだ。

『あたしの拳銃はコルト・ガバメントのステンレスモデル。あんたは？』

『おおっ！？ 話につてくれた』

『うるさい！ 早く言いなさいよ』

『俺はデザートイーグルとS & amp; W M29』

『へえ、大型拳銃なんて、あんたに上手く扱えるの？』

『当たり前だ。どっちもガキの頃からの付き合いだぞ』

『あっそう』

『……ええ！？ もう会話終了？』

『あんたと話していると疲れる』

『じゃ、俺の話を聞くだけでいいって』

懐かしいあの頃の会話が蘇る。俺はこれ以上余計なことを思い出さないように、アリアの拳銃から視線を逸らした。あの頃はできるだけ思い出したくないんだ。

一人状況を良く理解できていないキンジは俺とアリアを見比べる。

「『いた』って、何がだ！」

「あのヘンな二輪！ 『武偵殺し』のオモチャよ！」

アリアは隙間から拳銃を撃ちながら、

「あんたたちも ほら！ 戦いなさいよ！ 仮にも武偵校の生徒でしょ！」

俺達に次々と指示を出す。

拳銃を構えながら、横目でキンジを見る。今の俺なら一人でセグウェイを全滅できるんだが、それだと何か面白い。

「むッ、ムリだって！ どうすりゃいいんだよ！」

「これじゃあ火力負けする！ 向こうは七台いるわ！」

と、叫んでアリアは態勢を徐々に前のめりにさせていった。拳銃を撃つ為の無意識の行為なんだろうがさ。その前のめりの結果、キンジの顔に自分の胸を押し付けてることになってんだよな。

「！」

キンジの体が強張るのが見ていてよく解る。指一本も動かしてねえぞ。

ババツ！ バババツ！

銃撃の音をBGMにアリアの体はさらに前のめりに。キンジは確実に変わった。あんなに真っ平らに見えたのにアリアには確かにあったのか。女性特有の俺達にとっちゃ厄介そのものが。

ズガガガッ！ ガキンツ！

弾切れの音を出し、身を低くしたアリアが弾倉を差し替える。

「もう全滅？」

答えを解っているのに、俺は問いかけた。キンジの様子はもう確認済みだ。しつかりと雰囲気も目つきも変わっている。

「射程圏外に追っ払っただけよ。ヤツら、並木の向こうに隠れたけど……きつとすぐまた出てくるわ」

俺と目を合わせるとキンジは、

「強い子だ。それだけでも十分だよ」

「……は？」

いきなり口調が変わったキンジにポカンとするアリア。

「お姫様は拳銃を持って闘わなくてもいいってことさ。なあ、キンジ」

「ああ、頑張ったご褒美にちょっとした間お姫様にしてあげよう」
俺がアリアの手を引いて体を立たせ、キンジがアリアにお姫様だつこをする。これ、絶対に後で鳥肌が立つ。こんなホスト達、俺知らんよ。

ちなみにお姫様ことアリアさん。いきなりの二人の変貌、いきなりのお姫様だつこに顔を真っ赤にしてらっしゃる。驚きで開いている口からは、ネコっぽい犬歯が見えた。

「お姫様の観覧席のご案内。お願いする」
「まかせろ」

アリアをマツトの上に移動させたキンジを確認し、俺はセグウェイの死角になる場所へと移動する。

さて。豪華なヒステリアモードの二人組だ。二人もなるなんて珍しいんだからな。

セグウェイ七台にアリア。とくと見とけよ。

ガガガガガンッ！！

「七台なら、3.5ずつにするか？」

ウジーが銃弾を連射してくる中。隣に立つキンジの提案に、耳を澄ましてから首を振った。またも微かに車輪の音が聞こえてくる。

「七台ずつだな。もう一セット来る」

呟いて、セグウェイの方を覗き込むと銃口が十四に増えていた。

これは俺達で分け合って壊しなさいって犯人のご厚意なのかね。

「ノルマは七台ずつだ」

苦笑を浮かべ、今まさに銃弾が飛び交っているドアの方へと歩いていく。

「あ、危ない！ 撃たれるわ！」

はたから見れば自ら銃弾を受けに行く、自殺行為である俺達の行動をアリアは体を起こして止めた。少しは心配してくれてるみたいだ。

「アリアが撃たれるよりはずつといいさ」

「アリアを傷つけるモノは俺達が破壊するよ」

その言葉を言っているのは自分なのに客観的に思う。俺達って武偵よりホストに向いてるよな。なる気なんてさらさらないけどさ。キンジはともかく俺は一生武偵なのだ。

「だ、だから！ あんたたち、さっきから急にキャラ変えてんのよ！ 何をするの！」

何をつて当たり前のことを訊くんだな、アリア。そんなの、

「アリアを守る！」

それだけに決まってるだろ。俺達は言動も、言った後に振り向いてウイंकをするという行為もピッタリだった。こんなときにピッタリな俺らに呆れてもいいぞ。

ドアの外に飛び出した俺達に、銃口が十四個向けられた。そして一斉に銃弾を撃ってくる。

だが、当たらない。俺達には銃弾はかすりさえもしない。

理由は簡単。俺達には全て見えているんだ。ヒステリアモード時にはスーパーマンになると説明したよな。だからあり得ないことも簡単にできてしまう。今の俺達に銃弾はスローモーションのようにゆっくりと見えている。ほら、絶対に当たるわけがないだろ？

全ての銃弾が俺達の頭を狙っていた。普通なら頭を撃ち抜き、脳か血でも撒き散らしているところだ。

それを、キンジは上体を後ろに大きく反らして避け、俺は少し屈むだけで避けた。屈んだついでにノルマの七台をきちんと狙撃しておく。

……俺もキンジと同じ避け方をすればよかったかな。某映画の有名シーン、某スケート選手みたいだったし。

ズガガガガンっ！！

俺達のたった十四発の銃弾でUZIが吹っ飛ばされた。案外、あつけない最後である。

カラカラカラッ！！

……嘘、前言撤回。今までとは違う派手な車輪の音に顔を上げて見て、あっさりと前言撤回した。

視線の先にある物を認識すると俺は、考えを後にして目標に向かって走る。

目標。パンツァーファウスト3付きの四輪車。パンツァーファウスト3とは、簡単に言っちゃえば対戦車用のロケットだ。本来は武偵校の体育館などでなく、頑丈な戦車を破壊するための武器。

いくら体育館が防弾壁でできていようが、俺達の武偵校の制服がTNKという（略称しか知らない）拳銃持って闘うには有難い防弾繊維でできていようが……防ぎようもないのが来たな。

「冗談じゃねえ。こんなものをぶっ放されたら、最悪の結末が過る。これはさつき『あつさり』なんて思った罰か。」

とりあえず、発射される前に発射部分を破壊しなければ。

銃弾では無理。ならば俺はポケットからナイフを取り出す。切れ味のいいこいつと接触する速度を生かして下から上に。日水ヒナタオリジナルアッパー（ナイフ付き）、やり方は結構前に名前は今考えた。

「おりゃあーっ!!」

掛け声と共に勢い良く上にナイフを押し上げる。間に合った…か。パンツ！パンツ！

銃声が聞こえた後、パンツァーファウスト3付きの四輪は緩やかに俺の前で止まる。キンジが衝突を防ぐために撃ってくれたんだな。顔を上げて確認すると、発射部分も綺麗に切断されていた。どうやら、防げたようだ。これでもうないだろうな？

一難去ってまた一難。戻ると、なぜか跳び箱の中に入ってアリアが睨んでいた。怒っている理由は解らない。

目が合ったキンジは肩をすくめた。キンジも理由は不明と。

「お、恩になんか着ないわよ。あんなオモチャぐらい、あたし一人でも何とかできた。これは本当よ。本当の本当」

アリアは小学生の強がりを見せて、ゴソゴソと動いている。いたい跳び箱の中で何をしているんだ。

「スカートがホックが壊れてるようなんだ」
「だからか」

モールス信号の瞬きバージョンのウインキングでキンジと会話を
する。目の前の相手のご立腹中なのに、声に出して話していたらさ
らに機嫌が悪くなることを考えての手段である。

「そ、それに、今のでさっきの件をやむやにしようたって、そ
うはいかないから！ あれは強制猥褻！ れっきとした犯罪よ！」

跳び箱の穴（持ち運びのため指を入れる部分）から紅い瞳が覗い
ていた。

「……アリア。それは悲しい誤解だ」

説得口調のキンジがベルトを外して、跳び箱に投げ入れる。

「あれは不可抗力ってやつだよ。理解してほしい」

さて、キンジの説得はアリアに効くのか。気難しい子だから、で
きるだけ穏便によく頼む。

「あ、あれが不可抗力ですって!？」

キンジのベルトを使ってスカートを留め終えたアリアが、跳び箱
の中から俺達の前に降り立った。相変わらず、ちっこい。

「ハ、ハッキリと……あなたたち……」

さらにギロツと睨んでいたアリアの顔が赤くなる。ツインテール
を留めている赤いツノみたいな髪飾りのおかげで赤鬼みたい。泣い
た赤鬼じゃなくて怒った赤鬼だ。

がいん！

散々、ピンク色の小さな唇を震わせて、何をするのかと思えば勢
い良く床を踏みつける。

「あ、あたしが気絶しているスキに、ふ、服を、ぬ、ぬ、ぬ、脱が
せようとしてたじゃないっ！」

いや、あれはスカートが少し捲れていただけじゃん。

ツッコムスキもなく、恥ずかしいのか顔をさらに赤く染め上げた
アリアがまたも、

がいん！

と、床を力一杯踏みつける。そろそろ、床が可哀想だ。そんな
つて、有らぬ疑いをかけられている俺達も。

「そ、そそ、それに、ス、スス」

がいん！ がいん！

不憫だな、床よ。頑張れ、俺達も同じく不憫だ。

「スカートの中、覗いてたあああああつ！ これは事実！ 強猥ん
現行犯！」

こうして、冤罪は生まれる。……覗いてない。スカートの中を覗
くなんて行為は俺達はしない。………上の下着は本当に不可
抗力で見たけど。

「あんたたちいつたい！ 何をする！ つもりだったのよ！ せ、
せ、責任取んなさいよ！」

がいん！ がいん！ ががいん！

最後の響き、微妙にエコーがかかってたぞ。つつか、責任取れつ
て何もしてないのに。

「よしアリア、冷静に考えよう。いいか。俺達は高校生、それも今
日から二年だ。中学生を脱がしたりするワケがないだろう？ だか
ら 安心していい」

優しい口調で説得をしたキンジだったが、アリアの様子はという
と 顔をもつと赤くして両手を振り上げている。

「あたしは中学生じゃない！」
がすつつつ！

涙目で俺達（特にキンジ）を睨んで床を踏みつけた。今、木片が
飛んだ。

ってか、キンジ。これはかなり失言だったな。俺の知り合いに一
人だけ年齢よりも若く見られれば喜び、逆に老けて見られれば怒る、
なんて典型的な女性がいる。ホント、あの人は年齢の話題に関して
はうるさかった。そのおかげか、アリアが怒る理由も解る。

「違うだろ、キンジ？ この子はどう見ても小学生だ。それにして
も凄いな。アリアちゃんは」

そう言って、アリアの頭を撫でようとした俺の手が叩かれる。もちろん、アリアによって。

あれ？ 子供扱いをしたから怒ったのか？

それにしてはなんだか、顔を伏せているアリアのオーラがこわい。効果音は「ゴゴゴツ…」だ。顔を見ようとしても、丁度影になっていて見えない。

「こんなヤツラ……こんなヤツラ……助けるんじゃない！」「ばぎゅぎゅん！」

「うおっ！」「俺、キンジの足元に撃ちこまれる銃弾。キンジの顔色は青い。もちろん、俺もだ。いきなり撃つなんて反則だ……じゃなくて、なんで怒ってんだよ！」

バックステップでアリアから距離をとった俺達の耳に、さらに驚愕の事実が聞こえてきた。

「あたしは高二だ！！」「嘘だろ？」

至近距離で発砲される銃弾を避けながらキンジはアリアに飛び掛かり、俺はアリアの背後に回ってスカートの中の弾倉を気が付かないようにすり取る。キンジのおかげで、拳銃は二丁とも弾切れだ。

「んっ やあっ！」「うっ ……！？」

掛け声を出し、身をひねったアリアがキンジを投げ飛ばした。徒手格闘技もできるのか。しかも、あのヒステリアモードのキンジが飛ばされるほどの腕前だ。

「逃げられないわよ！ あたしは逃走する犯人を逃がしたことは！一度も！ ない！ あ、あれ？ あれれ、あれ？」

ま、俺達は「逃走する犯人」ではなく、「説得を試みたが逆上された可哀想な武偵」だからな。

「凄い自信家のアリア、君の探し物はこれかな？」

キンジよりも先に体育館倉庫から脱出していた俺は、アリアにも

よく見えるようにすった予備弾倉を掲げる。やはり、俺のことは気が付いてなかったようだ。気配完全に消してたからな。遅刻して席に座るときに教師にもバレない腕だ。それを冷静さを欠いているアリアに気が付かれるわけがない。

「あっ！！」

スカートを探る手を止めたアリアが、拳銃をぶんぶんと振った。そんなことをしても弾は出ないって。

「ほら、逃げるぞ」

キンジの肩を叩いて急かす。後ろではアリアが

「もう！ 許さない！ あんたたちがひざまずいて泣いて謝っても、許さない！」

セーラー服の背中から隠し持っていた刀を二刀流に抜いているとこだった。二丁拳銃に二刀流。それと徒手格闘。何でもオツケーか、アリア。

「強狼男共は神妙に つわおきやつ！」

「足元はちゃんと見たほうがいいよ。武偵ならね」

自分の予備弾倉からバラまかれた銃弾で、後ろに転ぶアリアの手から刀を奪い取って地面に置く。危険物は手の届かないところに。

「ちよつと！ な、なにすんのよ！」

騒ぐアリアの体を抱え上げ、

「ほいっと」

落ちても全く怪我をしないふかふかのマットに、その小柄な体を投げた。

「じゃあね。アリア」

にっこり笑って手を振った俺は、ポケットの中にあった小さな玉を地面へと叩きつける。叩きつけられた玉はぼふつと煙幕を吐きだした。これで視界が邪魔されて追いかけられる心配はナシ。

「どこでそんな物を？」

離れて見ていたキンジに不思議な顔で聞かれる。

「キンジのアミカ、風魔に貰った。まさか、こんな時に役立つなん

てな」

さすが忍者の末裔と噂されている奴だ。煙幕を出す玉なんて今時
持つてる奴は少ないぞ。

説明しとくと「戦徒」アミカとは先輩後輩でコンビを組む武偵校特
有の制度だ。先輩が後輩に一年間指導することで……えっと……よく
解らんが、取り敢えず先輩に一年間戦闘のイロハを教えてもらっ
てこと。アミカは女。アミトは男と区別もされている。俺には縁の
ない話でもある。

現実逃避のために違うことを考えていた俺の背に、アリアのデカ
イ捨てゼリフがふつかかってきた。

「この卑怯者！ でっかい風穴 あけてやるんだからあ！」

……早く、この場から逃げないとな。俺達はアリアの声を聞き流
し、一目散に走って逃げた。三十六計逃げるに如かず。

これで終わりだ と俺は思っていた。これで今まで通りの武偵生
活を送れるって。チャリジャックもアリアとの出会いも過去の話で
「そういえばあんな事あったよな」なんて数年後にふと思い出して
懐かしむような。そんな思い出で終了だと。

けど、これは始まりだったんだ。今までの人生は長い長いプロロ
ーグに過ぎず、このアリアとの出会いが 俺の物語が動き出すたっ
た一つのきっかけであった。

日常から非日常へ。言うならば、冒頭の「空から女の子が降って
きた」その女の子が神崎・H・アリアなのだ。そしてそのことに俺
が気が付くのは随分先の話である。

プロローグ下 誤解。そして始まり（後書き）

次の話にはオリキャラが登場しますので。

そういえば…煙幕を出す玉って何て名前何でしたっけ？ 思い出せなくて結局そのまま書いてしまいました。

第一話 騒動後の平和？（前書き）

オリキャラ登場です。

第一話 騒動後の平和？

アリアから逃走後、ヒステリアモードが切れた俺達はうなだれて歩いている。ヒステリアモードになってしまった自分に自己嫌悪に陥っているんだ。当たり前前の結果だが始業式には結局遅れている。

「一応、教務課の方には連絡しとくか」
「そうだな」

投げやりな返事をして俺は鞆を探った。アリアから逃走中にグラウンドに落ちていたのを回収したんだが、爆風やらで鞆はすっかりボロボロだ。最近買ったやつなのにさ。

ため息をついて、変わり果てた鞆から携帯を取り出す。黒いボディの携帯はどうやら無事で、開いた瞬間に『メール件数100件』と表示された。あと、『不在着信200件』とも。

……怖っ！！俺達が色々と大変な目にあっているあいだに何があった。俺の携帯が非常に怖い状況だ。それに相手が簡単に予想できてしまうのもある意味怖い。

「どうした？」

立ち止まり携帯を凝視する俺に、キンジの心配げな声がかかる。

「すまん。ちよつと先に行つててくれないか？ 妹から何か連絡が入つてて……こりゃ、時間がかかりそうだ」

答えながらメールの内容を見て、引きつった笑みを浮かべてしまふ。

『f r o m 大和唯^{やまと ゆい}』

Subject 至急連絡ちょうだい！！

本文

ヒナくん。ついさつきお父さんから聞きました。『武偵殺し』に友達と襲われたって！

大丈夫ですか？ 私、心配で心配で……朝食も米粒一つしか食べられません。大丈夫で健康でいつも通りのヒナくんだったら連絡く

ださい。

一生待っています。

中々にツツコミどころの多いメールだ。最後の一行もゾワツときた。一生待っていますって…重いメールである。

「…ああ。報告は俺がしとくから、とにかく頑張れよ」

察してくれたのかキンジは、何も訊かずに先に行ってくれた。お前も白雪にされてて解るんだよな。

近くにあったベンチに腰掛けて通話ボタンを押した。

ブル……ガチャツ

ワンコールもせずに相手は出てくる。まさか電話前で待機でもしていたか。携帯片手に受話器をジツと凝視する姿があっさりと思いつかぶ。

「ヒナくんっ!? 大丈夫だった? 無事? ケガは?」

「俺は大丈夫だから、安心しろ唯」

「よかったあ。ヒナくんがケガしちゃったら私も後を追ってケガしちゃうとこだったよ」

安堵の息を受話器越しに吐きながら、怖いことを言っている少女、大和唯は俺の二つ下の妹だ。いや、妹というか義妹。血は繋がっていない。

「絶対ケガすんなよ。俺が芳樹よしきさんに半殺しにされちまうからな」

「うん。お父さんにヒナくんが殺されちゃったら後を追って死んじやうから! 安心してね」

「安心できるか! いいか? 後を追うとかもナシだ。それに俺は絶対に死なないからな」

日水ヒナタに大和唯。俺達が兄妹になったのは六年前、丁度俺が十歳だったときだ。日水なぐれ薙なぐれこと俺の父さんが亡くなり、一時期は親戚に預けられていたんだが折り合いが悪く、結局は父さんの友人の大和芳樹さんに養子として引き取られた。こうして、芳樹さんの一人娘の唯と兄妹になったのだ。

俺の父さんは、どうやら親戚内でもあまり良く見られていない。兄を置き、幼い俺と色んなところを旅していた無責任な人ってレッテル付きだ。『殺しのライセンス』と呼ばれている公安0課に所属していたのも原因の一つだろうけど。

そして、俺も評判は悪かった。「日水ヒナタ」と自分の名を名乗ると親戚の態度が途端によそよしくなる。陰口を囁くようになる。昔は解らなくて戸惑ったが今では原因はよく解る。あの頃の俺は、自分のことをよく知らなかったってことだな。

『そうだよ、ヒナくん強いもん。簡単に死なないよね。今ならお父さんにだつて勝てるよ!』

「それはいくらなんでも無理だ」

現役の公安0課の人に勝てるわけがなからう。それに芳樹さんって『公安0課の長』なんて言われている程の実力者だ。

「それと唯。俺のことはお兄ちゃんと呼べと言っているだろ?」

『ヤダ』

「ヤダつて…」

『絶対にヤダ。ヒナくんはヒナくんだもん!』

なぜか昔から唯は俺のことを『お兄ちゃん』とは呼んでくれない。

『ヒナくんをお兄ちゃんって呼んじゃうと負けた気がする』

いったい何に負けるのか。

「一応、芳樹さんの養子となっているんだけど。日水のままです」

『うーん? じゃ、婿養子ってことにすれば!』

「俺、結婚してねえよ」

『結婚しちゃえ!』

「無茶苦茶言うな」

義理だが妹である唯と結婚する気はない。なんだか政略結婚みたいだし。

「唯。お前は(黙っていれば)結構可愛い女の子なんだから。結婚なんてそう簡単に決めるんじゃないぞ」

そんな中学生で決めたら泣くぞ、主に芳樹さんが。

『そっか、マリッジブルーがまだだったね。ごめんね、ヒナくん』
「……………で？ 無事も確認できたし切るぞ」

これ以上、マリッジブルーやら話が発展するのを避けるために強引に話を切り上げたいところだ。芳樹さんに聞かれたらまた尋問されるし。芳樹さん、強面で恐れられているが、近い人ほど優しさが見えるというか。唯に関しては親バカって言葉が似合う。

『あ、言い忘れてた。教務課の方に護身用の武器届けてるからね。もちろん、公安0課からで！』

「それって職権乱用だ！ 芳樹さんに何をやらせてんだよ」
『ヘリコプターでパーツで。アヤ姉さんが届けたのです！』

この妹、父親が公安0課で働いているからか拳銃とか危険物の扱い方も手慣れてらっしゃる。あと、芳樹さんの部下の使い方も。

『選りすぐりの手榴弾も入ってるよ。これをポケットに入れとけばいざというときにも大丈夫』

「ポケットに手榴弾装備の武偵って聞いたことねえから」
『うん。私も聞いたことないね』

「もういいか？ そろそろ行かないと授業に遅れる」
と言いながらも、さっきから唯の話がいつまでも続くと思って歩いている。

『それとアヤ姉さん、今日はそっちに泊まるって。いいなあ、私もそっちに泊まりたいよ。今度の休みにお泊りしてもいい？』

「俺が住んでいるのは男子寮だ！ じゃあな！」

俺は唯の返事も聞かずに電話を切った。お泊まりの話になると唯が粘りだすからな。一度、マジでお泊りセット持って来たこともある。むろん、追い返したが。

「ってか、アヤ姉さんがこっちに来てるって…また愚痴聞かされるんだろな。」

「愚痴を聞かされる俺の身になってくれ…」

お呼び出しは今夜だろうかね。重たい足取りで俺は学校へと歩き

出した。

第一話 騒動後の平和？（後書き）

ヒナタの家事情とか少し書いてみました。家族構成はおいおい書こうかと。アヤ姉さんは早めに登場させますけどね。

> オリジナルキャラ紹介<

カミナ ナガレ
日水 薙 嘸。

ヒナタの父親。生前、ヒナタを連れて様々な場所を旅した。

ヤマト ヨシキ
大和 芳 樹

薙 嘸の親友であり戦友。“公安〇課の長”と呼ばれている。冷徹だとよく人に思われるが、近しい人ほど芳樹の不器用な優しさには気が付く。ちなみにヒナタには「芳樹さん」と慕われている。顔は強面でいつも不機嫌そう。唯に関しては親バカそのものである。

ヤマト ユイ
大和 唯

芳樹の一人娘であり、ヒナタの義妹。髪は黒髪のロングで、白雪に似た大和撫子美少女。幼い頃から、公安〇課とは親しくしてきたあの意味怖い少女。

次の話は一週間以内にどうか投稿できればなと思っています。

第二話 転校生との間違った誤解

さて諸君。『転校生』という単語に少なからず魅力を感じるだろうか？ 高二に成り立ての時期に転校生だ。想像してみてくれ、転校生が女子だと知ったクラスの男子が放つソワソワっぷりを。転校生が男子しかも美少年と知ったクラスの女子の騒ぎっぷりを。大半は新たな仲間に興味を抱くだろう。

けど、俺はしなかった。興味もないってか関わりたくもない。その転校生が俺にとって無害だったら良かった。現実には手厳しい。だってそれが……今朝出会ったあの勝手に誤解して発砲しだした凶暴女、神崎・H・アリアだったからだ。フレンドリーにできるわけないだろ。

電話の後、学校に着いた俺は、とりあえず教務科の方へと寄った。寄って…

「日水君、遅刻ね」

教務科に入った俺に、担任の高天原先生からかけられたのはそんな言葉だった。

「いや、遅刻つて。キンジに遅刻理由聞いてないっすか？」

俺が今年から在籍することになった二年A組。担任欄を見て安心した。常日頃から拳銃発砲可能な武偵校なんぞに就職する教師は、たいがい自衛隊やらマフィアやら、‘元’という文字が後に付いても凶暴性は薄れない奴らばかりだ。その教師達の中でも一際マシなのが、高天原先生である。なんで武偵校なんかにいるのか解らないような、気の弱い女性だ。こんなとこいたら、婚期遅れんぞ。

「聞いてますけど。『日水のアホは遅刻が多いから注意しとけ』と蘭豹先生に言われてまして」

これまたおつとりと高天原先生は微笑んでいる。

蘭豹かよ。嫌な名前を聞いてしまった。蘭豹、長いポニテール、

昔は香港で無敵の武偵と恐れられていた大女。去年は悲しいかな、遅刻するたびにあいつに見つかってその都度、捕まったらフルボッコの追い駆けっこをしていた。ちなみに捕まえられたことはない。ありゃ、捕まったら死ぬ。

「今日のは違いますって。それよか、俺宛に何か届いてません？」
「それならついさつき、公安0課の方から届いてますか？」

高天原先生の指差した場所には、段ボール箱が鎮座していた。段ボール箱って……。どんだけ護身用の武器を入れられたんだ。

「荷台貸してくれませんか？」

ということ、荷台を貸してもらうことにした。しょうがねえよ、あんなの持って移動できないし。

「それと帰りまで、置かせてください。あんなん持って移動だなんて不可能っす」

「解りました。目印は………。必要ないわね」

ちらつと荷台の上に置かれた段ボール箱を見て高天原先生が判断した通り目印なんていらぬ。段ボール箱の開けるとここに大きく唯の字で『ヒナくんの』なんて書かれていて、側面なんてさらに、

『武偵殺しに襲われたって聞いたぞ。生きてるよな？』

『バカ。ヒナタが死ぬわけねえだろ！』

最初辺りは良かった。そんな感じで俺の身を案じる言葉ばかりである。

『ま、ケガしたら舐めて治せ』

いや、無理だろ。

『舐めて治すんじゃないぜ。武偵校はきつと美人のセンスが治してくれるはずだ！』

『なぬ！ ずりいぞ！』

そんなわけあるか、バカ。どんな願望抱いてんだよ。

『メアド変えました xxx@xx』

ここに書くな。メールで連絡しろ。

『オレ、彼女できました！』

自慢すんなよ。

その後も酷かった。もう何で段ボール箱にそんなん書いてんだって。

『私達、結婚します』

『最新作の格ゲーやったか？』

『昼休み。屋上にて アヤ』

『合コン参加は松野まで！』

ホント、何してんだあいつら？ しかもどさくさに紛れてアヤ姉さんも書いてるよ。

公安0課は『殺しのライセンス』なんて恐れられ、国内最強とも呼ばれている機関だ。ここに好き勝手書いている奴らは、公安0課直轄の部隊のメンバー。公安0課の将来を担う若者達である。

腕は確かで武偵ランクで表わすとSランクレベルがゴロゴロと。なのに、殺伐としていない不思議な場所だ。

俺は中学の武偵校に入るまで数年程、そこで公安0課としての訓練を受けていた。訓練内容は体力作りに射撃の練習や徒手格闘技やら、とにかく全て叩き込まれる毎日だ。できれば、訓練は思い出したくないのが多いけど。

段ボール箱から視線を逸らし、何となく廊下側の窓を見る。

赤いツノが見えた。どっかで見たような赤いツノだ。ピヨコピヨコと揺れながら、赤いツノは移動する。そして、教務科のドアの前で止まった。

「そうそう。今日は可愛い転校生さんが来るんですよ」

そんな声の後、

ガラッ

とドアが開かれた。ドアを開いたのは、赤いツノみたいな髪飾りの持ち主、紅い瞳にピンクの髪の毛。これまた、どっかで見たような。

「あら、神崎さん。どうかした？」

教務科に入ってきたその子は俺と目が合うと、ドカドカ激しい足

音を鳴らし俺の前に立った。ジロツと睨まれて、気が付いた。

「この子、朝の凶暴女だ。」

「先生。こいつの名前なんて言うの？」

「そういえば俺、名札を付け忘れてる。」

「え？ 日水ヒナタ君だけど。あれ？ 日水君って転校生の神崎さんと知り合いなの？」

先生。そこであっさり俺の名前を答えなくてくれ。この凶暴っ娘、アリアにとって俺は敵なんだから。

「ふーん、日水ヒナタね。じゃあ、ヒナタ。学校案内しなさい」

「は？」

『じゃあ』って何だ。なぜに学校案内？ ってか、もう呼び捨てかよ。

「あたし、転校生だからまだここの武偵校に慣れてないの。だから案内して。案内ぐらいできるでしょ？」

「そんぐらいできる。できる…けどさ。俺にも授業ってもんがある…」

授業なんて、ただの口実だ。俺はアリアと一緒にいたくない。理由は二人つきりになると、アリアが直ぐに拳銃を抜きそうだから。今の俺は対処も逃げることもできそうにない。

頼みの綱と、高天原先生を見るが、何か誤解して俺達を嬉しそうに見ていた。……だめだこりゃ。

「いいですよ。日水君は日頃からサボってますから」

「言う通りだけどさ。」

「そう。ほら、行くわよヒナタ！」

問答無用で教務科の外へ引っ張り出された。小柄なくせに力はあるんだな。なんて呑気なことを考えながら、笑顔で手を振る高天原先生を恨めしげに見た。

煮るなり焼くなり好きにしる。そんな覚悟で俺が引っ張られて着いた場所は人気のない廊下の隅。おっと、いきなりピンチ。元々、

今は授業中で人が少ない。廊下に出てるのは俺らぐらいだ。

「で、どこを案内すればいい？」

「別に案内なんてしなくていいわよ」

引っ張っていた腕を離し、振り返るアリア。またジロジロと見られてる気が。

「案内しろって言っただろ？」

それとも、やはりここで撃たれてしまうのか。

「別に案内なんてしなくても、案内図見るだけで十分でしょ」

さいですか。俺はちゃんと隅々まで見たけどさ。実物とは違うってことになったら困るだろ。

「なら、俺は教室に戻らせてもらっぞ。これ以上、授業に遅れたくないからな」

「先生がよくサボってるって言ってたじゃない」

踵を返した俺の腕が掴まれる。それを言われるとツライ。事実だ。

「今日はなんとなく受けたい気分なんだって。ほら、お前も自分の教室に行け」

「あたしも同じクラスよ」

「それが？」

「連れて行きなさい」

何だか、こいつと喋っていると疲れる。命令口調なところもそうだし、どこか駄々っ子のような雰囲気なんだな。

「さっき場所は解るみたいなこと言ってなかったか。それに俺がお前を教室まで……」

アリアの手がスカートに伸びているのを見て、俺は諦めたように両手を上げた。ホールドアップ。武力には勝てねえよ。今の俺じゃ。

その後、渋々と教室に連れて行ったはいいが、この凶暴^{アリア}。歩いてる間も何だかんだと聞いてきた。無視すると蹴るわ、拳銃で脅しつけるわで、俺の体は痣だらけじゃないか今。

教室に入ってから俺がアリアと来たということでクラスの連中

が、ザワザワしだし。同じクラスのキンジは口をあんどりと開けて驚いていた。

「おい。どうしてあの子が？」

席は都合よくキンジの前。しかも俺達からはアリアの場所は死角で見えない。

「運悪く同じクラスなんだとよ。ここまで一緒に来た理由は、脅されてだ」

授業の準備をしながら、後ろのキンジと会話する。

「うわっ……」

キンジはうんざりとした表情で頭を抱えた。前を向いた俺も、もちろん頭を抱える。さて、まだまだ嫌な予感がしてくるぞ。

俺の予感つて的中しすぎでないか？

「先生。あたしはアイツらどっちかの隣に座りたい」

記念すべき二年A組最初のホームルームの、最初の自己紹介はそんな言葉で始まった。アリアによって。教壇に立ったアリアのビシツと伸びた指は、俺とキンジを指している。

わあっ！！

教室内は一瞬の沈黙後、意味の解らない歓声で包まれた。キンジは絶句して椅子からズリ落ち、俺は聞こえないフリをして窓の外を見る。

「な、なんでだよ……！！」

後ろから聞こえる苦々しげな呟きに、あくびをしながら頷いた。いやあ、本当に何でだろうな？ 気に入られたわけでもないのにさ。逆に嫌われてる気が……

「よ……良かったなキンジ！ ヒナタ！ なんか知らんがお前らにも春が来たみたいだぞ！ 先生！ オレ、転入生さんと席代わりしますよ……」

真ッ先に手を上げて立ちあがる大男、武藤剛気。車輛科^{ロジ}の優等生

であるが、こいつは絶対にアホだ。そう簡単に席を譲る奴なんてアホに決まってる。

「あらあら。最近の女子高生は積極的ねえー。じゃあ武藤君、席を代わってあげて」

さらに大きな歓声に包まれる教室。高天原先生がアリアの方を振り向いたのを見て、俺は武藤の大きな背中に蹴りを放つ。アホは死ぬ。

「あら？ 武藤君？ どうしました？」

床に倒れ伏している武藤を見て首を傾げる先生。

「何かに躓いたんじゃないっすかね」

「あらあら、気をつけないと」

それで、信じてしまう先生もどうだろう。この人、やっぱ武偵校に合ってるない。

「キンジ、これ。さっきのベルト」

拍手喝采の中、元武藤の席に近づいてきたアリアがベルトを投げる。そういや、制服上下共に着替えている。

「理子分かった！ 分かつちゃった！ これ、フラグばつきばきに立ってるよ！」

アリアからベルトを受け取ったキンジを見て、キンジの左隣に座っていたヤツ、峰理子が席を立ちあがった。

だが、この一連の動作から分かるはずもなく…

「キーくん、ベルトしてない！ そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた！ そしてそして、ヒーくんがツインテールさんと登校してきた！ これ、謎でしょ謎でしょ！？ でも理子には推理できた！ できちゃった！」

そして、この理子という奴は、推理と言っちゃいるが探偵科インケスタのバカ。そんな奴がまともな推理なんて無理だ。フリフリに改造された武偵制服と、ツーサイドに結っている薄茶の髪は理子が飛び跳ねるたびに揺れる。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！

そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！ でも、ヒーくんは彼女と付き合っていて今日も仲良く登校してきた！ 遅刻してきたのも彼女といたから！ つまり三人は 熱くドロドロとした三角関係の真っ最中なんだよ！」

なんだそりゃ、どこぞのヘッポコ探偵でももつとマシな推理をするぞ。それと、ヒーくんってあだ名もやめてほしい。

「な、なんだと！ いつのまにこいつらがこんな可愛い子と!？」

「三角関係だつてえ！」

「フケツ！」

おいおい、そんなおバカな推理でも信じてしまうのか。俺とキンジがアリアと三角関係ってありえんだろ。それに、どう見ても仲良く登校してるように見えなかっただろうが。

すぎゆぎゆん！

激しく誤解情報を信じきって騒ぐ教室で、二連発の銃声が鳴り響く。

「れ、恋愛だなんて……くっだらない！」

すっかりと静かになった教室に、アリアの大声が響いた。両手には先程銃弾を吐きだした拳銃が二丁。

まさかの行動にストンと理子は席に大人しく座る。アホな理子でも、アリアの凶暴さは解ったようだ。

「全員覚えておきなさい！ そういうバカなことを言うヤツには……！」

教室内をギロリツと顔を赤くしながら睨みつけ、

「風穴開けるわよ！」

本気でやりかねないよな。なんたって、アリアは自己紹介の途中で発砲したおそらく武偵校初の生徒なんだから。

おまけ？ 緋弾のアリアNG集、何かやってみたかっただけ（前書き）

結構前にバラエティー番組でやったのをモデルにかいてみました。

おまけ？ 緋弾のアリアNG集〜何かやってみただけ

プロローグ上 危険な通学 より

>久しぶりのチャリ通学<監督：レキ

「ヒナタ！ どうする？」

「とりあえず……」

俺はセグウェイから目を逸らし、前を睨みつけた。

「逃げるぞ！」

そして俺は足に力を入れる。

バキッ！

嫌な音がして、自分の足を見ると……ペダルがなくなっていた。

「こげねえじゃんっ！！」

ドガアアアン！！

うん。久しぶりだったから錆びてたんだね。あるある……ねえよな。

「……カット」

レキの目がひたすら冷たく感じる。

プロローグ中 少女と拳銃とファンシーと より

>ヒステリアモード発生条件<監督：理子

「……痛つてえ」

受け身をとる暇もなく突っ込んだので、体のあちこつちが痛い。

俺は痛さに顔をしかめて目を開けた。

「…………」

目の前の光景に言葉をなくす。

「あの……アリアさん？ この妙なモノはなんですか？」

目の前には“桃”が広がっている。あ、コレももまんですね。

「……ファンシーじゃねえじゃんよ……」

ももまん模様の下着ですか……どこに売ってたよ。そんな珍下着

「はい、カットカットオ！！ もうっ！ アリア、下着間違えてるって！ この場面は大事な場面なのですよ？ アリアルートのイベントシーンだったのにい」

おい、理子に監督任せたのは誰だ。責任者でてこいや。

> キンジ救出劇< 監督：アリア

「行くぞっ！ ヒナタ」

キンジが俺の指定通りに横切った。

パンツ！ パンツ！

俺が使っているDEは撃った後の反動が大きい。小さい頃から使っている拳銃でなれていても、油断すると手が痺れて撃てなくなる。小さい頃はそれでよく肩を外していたもんな。それに比べりゃ手の痺れぐらいマシか。

「つて……ああ！！」

間違えてタイヤに撃ってしまった。この距離からあんな細いタイヤに二発とも。

「お？ おわっ！！」

へにやへにやとキンジの自転車のスピードが遅くなる。ちなみに爆弾は減速しても爆発してしまう。

ドガアアアン！！

「キンジ、すまん」

ヒステリアモードでもミスはするさ。人間だもの。

「カットお！！ このバカヒナタ、マジメにやりなさいよ！」

プロローグ下 誤解。そして始まり より

> 目覚めた後に…< 監督：ナシ

「おい、起きろよ」

ため息を吐いてキンジが、遠慮がちに少女の体を揺さぶる。『神崎・H・アリア』胸元に付けてある名札も揺れる。

それにしても小さい少女だ。多分、中学生だな。いや、下手した

ら小学生？ インターンで入ってきた武偵か。さっきの拳銃の扱いとか、将来有望な小学生さんなこった。ってか、小学生に助けられたってすげえ情けない話だ。

「ん……ん？」

薄く少女の目が開いた。数秒間の沈黙後、少女の目はどんどんと大きく開いていく。

そして、出てきた言葉が…

「ももまん……」

クテリ……いや、寝るなよ。謎の言葉を残して寝るな。セリフ間違えてるから、アリアさん。いくら疲れたからって寝るのはどうよ。

「どうするコレ？」

「うーん。まあ、NGで」

> 衝撃の事実<

「あたしは中学生じゃない！」
がすつつつ！

涙目で俺達（特にキンジ）を睨んで床を踏みつけた。今、木片が飛んだ。

ってか、キンジ。これはかなり失言だったな。俺の知り合いに一人だけ年齢よりも若く見られれば喜び、逆に老けて見られれば怒る、なんて典型的な女性がいる。ホント、あの人は年齢の話題に関してはうるさかった。そのおかげか、アリアが怒る理由も解る。

「違うだろ、キンジ？ この子はどう見ても小学生だ。それにしても凄いな。アリアちゃんは」

そう言っつて、アリアの頭を撫でようとした俺の手が叩かれる。もちろん、アリアによって。

あれ？ 子供扱いをしたから怒ったのか？

それにしてはなんだか、顔を伏せているアリアのオーラがこわい。効果音は「ゴゴゴツ……」だ。顔を見ようとしても、丁度影になっていて見えない。

「こんなヤツラ……こんなヤツラ……助けるんじゃないかった!!」
ばぎゅぎゅん!

「うおっ!!」
俺、キンジの足元に撃ちこまれる銃弾。キンジの顔色は青い。もちろん、俺もだ。いきなり撃つなんて反則だ…じゃなくて、なんで怒ってんだよ!

バックステップでアリアから距離をとった俺達の耳に、さらに驚愕の事実が聞こえてきた。

「あたしは高二だ!!」

そして床を蹴り……

バキキツ!

蹴った床が音を立てて割れる。

「なによ!!」 なんてこのタイミングで床なんて抜けるのよ!!」
足が床に突き刺さった状態で、アリアが叫んだ。

いや、あんだだけ踏んだら床も壊れるわ。

おまけ？ 緋弾のアリアNG集〜何かやってみたかっただけ（後書き）

真顔で咬むとか、やっぱり俳優の人たちもミスするんですね。少し親近感がわきます。

私の場合、普段の生活で結構咬むんですが…主に「ぱ」「とか」「ぬ」とか。

そんなネタより次の話を書けよと自分でも思います。冬休み入るんで、まとめて投稿できたらいいのにな。

第三話 自分に対する嫌悪感（前書き）

やっと投稿できました。

遅れてすみませんです。

あ、それと。アヤ姉さんちょっと登場です。

第三話 自分に対する嫌悪感

クラスメートの追及をキンジを囮に巻いて、やっと待ち合わせ場所の屋上へ着いた。すまん、キンジ。お前の犠牲は無駄にしない。心の中でキンジに謝りつつ、途中購買で買ったメロンパンを頬張る。…たまたま取ってしまったパンだが、結構美味しいもんだ。

ギイ…

扉の開く音に振り返ると、作り物のように整った顔に一切の表情が表れていない、狙撃科スナイプのレキが立っていた。

「よお…」

挨拶をした俺を、一瞥しレキは狙撃銃のドグラノフを肩にかけたまま地べたに体育座りで座る。

無言だが無視されたわけじゃなく、その無言がレキらしさなのだ。レキといえば、無表情、無感情、無関心の無を三つに。頭に常に付けているオレンジのヘッドホン。いつも携帯しているドグラノフ。無表情過ぎ、無感情過ぎ、無関心過ぎで他の生徒からは『ロボットレキ』なんてあだ名もついている。こいつが誰かと楽し気に話しているところなんて見たことがない。

…昔の俺なら、こんな奴放っておかなかっただらうな。その無表情に表情を表せて…

ふわりと、レキの青みがかった短い髪が風にたなびいた。そのおかげか、俺は急いでそれ以上のことを考えるのをやめる。

「レキって、いつもヘッドフォンで何を聴いてんだ？」

余計なことを考えないよう、昼ご飯のカロリーメイトを食べ終えたレキに話しかけた。正直、答えてくれるかなんて微妙なところだが。

「風です」

「風？」

答えてくれたが、妙な答えが返ってきた。ヘッドフォンで聴いて

いるのって音楽じゃないのかね。

「風つてのはアーティスト名とかじゃなく？ 今。吹いてる？」

「はい」

こくりと頷くレキ。こいつの場合、冗談じゃないな。だとしたら、本当に風を聴いているのか。というか風を聴くってどんな感じだろう。

「もし良かったら聴かせてくれないか？」

「……」

カポツとヘッドフォンをとったレキが、無言で差し出してくる。

「ん。あんがと」

少し近くに寄らなくてはならないのが俺にとって抵抗があるな。

ヒステリアモードはふとしたハプニングで簡単になる。俺もキンジも苦労するんだ。

受け取ったヘッドフォンを頭に付けて耳を澄ます。たしかに聞こえてきたのは風の音だった。聴いているだけで爽やかな音。心が静まる音だ。

『今日もサボリか？』

『……関係ないでしょ』

『関係ないってか、サボリはいかんよ』

『じゃあ、今ここにいるあんたは何なの』

『もちろんサボリ』

『……』

『おい、寝んな。もうちょい喋ろつや』

『ほっといて』

『冷たくされると、しつこくなるんだなこれがさ』

『……最悪』

『けども、やっぱりお喋りはやめとくか。俺も同じく眠いし。では、お昼寝しますな。おやすみ』

『ホント……自分勝手なヤツ』

あの日は、風がとても心地よく、昼寝するにはちょうど良かった。いつもの場所で寝ようと屋上に上がり、あいつを見つけた。俺に気が付くと、見飽きた不機嫌顔でため息をつくあいつ。肩ぐらいまである黒髪がサラサラと風にたなびく姿が印象的だった。少し見惚れてしまうほどに。

「……いい風だな」

感想を言つて、レキにヘッドフォンを返す。最近、妙に過去を思い出す機会が増えている。今を楽しくうをモットーに生きている俺にしては珍しく。

ヘッドフォンを付けたレキは、立ち上がり扉の方へと歩いた。

「またな、レキ」

レキは返事をすることもなく屋上から出ていく。気を利かせてくれたのだろうか。

いや、気を利かせたというか……なんともレキに悪いことをしてしまった。

「気配を消してるつもりでも、ニヤニヤしながら見られたら誰でも気が付くっての」

後ろを振り返って、さっきからニヤニヤ俺達を眺めていた悪趣味な奴を睨みつける。

「あはは。ばれた？ いやあ、ひゅう君が女の子と話している光景が、微笑ましくてねえ」

全く悪びれてない様子で物陰から出てきた女性。黒いスーツをピシッと着て、長い茶髪を一つにまとめ、化粧を軽く施した顔には眼鏡をかけている。見た目は綺麗な女性。さらに眼鏡を付けていることによって理知的なデキる印象を見る人に与える。

仙波綾香。通称、アヤ姉さんはそんな見た目の人だ。だが、見た目に騙されるな。この人、見た目ほどちゃんとした人じゃないから。服は脱いだら脱ぎっぱなし、時間に遅れる、酒癖が悪い、人に愚

痴る、基本怠け者……思い出したら頭が痛くなるだらしなさ。それがアヤ姉さんの実態だ。

「どこが微笑ましいだ」

俺の隣にあぐらをかいて座ったアヤ姉さんは、

「ひゅう君が女の子大丈夫になっただんだなあって」

呑気にニコニコと笑みを浮かべた。

「レキはSランクのスナイパーだ。ちゃんとランクも確認している」

「……まだ、ダメ？」

だが、俺の一言に一気に顔を曇らせる。

「ああ、ダメだな。アヤ姉さんのおかげで昔よりかマシだけどさ」

「でも、姉さんとしては昔みたいに分け隔てなく接してほしいのになあ。相手のランクを気にせずに」

気にせずだね。今の俺には難しい注文だ。

「で、今日は何の愚痴？ 芳樹さんがまた厳しい？ それとも昼食が不味い？」

話が嫌な方向に向いたので、俺は話題を変える。

「…ううん。違うよ」

「公安0課から転職したいとか？ ……うあっ」

アヤ姉さんがバシッと俺の顔に紙を押し付けた。インクの匂いが鼻につく。

「公安0課から定期検査のお知らせ。話題変えようとしてもダメだかんね」

顔に貼りつく紙を見て、苦い表情を浮かべた。何の定期検査なのかは解っているので、尚更嫌だ。

「別にこんな検査なんてしなくても、俺はキンジ以外の生徒とはあんま深く関わってねえし。女子なんてもつての外だ。おかげで『女嫌い』ってあだ名も付いてる」

紙を折り畳んでアヤ姉さんに突き返す。定期検査とは一般の体調を調べるような検査じゃない。俺のははるかに重い。子供が注射を怖がるような、そんな生易しい恐怖心で拒絶してるわけじゃないん

だ。

ただ……嫌悪するだけ。自分自身を。

「そつ……でもさ。その遠山君って子知ってるの？ H S S ・ G のこと」

H S S ・ G。その単語に俺は拳を握りしめる。

「キンジはヒステリアモードの本家だ。本気を出せば俺なんかより数倍強い」

「そっか本家さんね。その子のこと信頼してるんだ？」

確かに俺はキンジの強さを信頼している。けど、H S S ・ G を話さないことは少し理由が違う。

俺は、怖いんだ。H S S ・ G を知られたときの反応が。情けないことに。

第三話 自分に対する嫌悪感（後書き）

> オリキャラ紹介<

センバアヤカ
仙波綾香

公安O課でヨシキの下で働く女性。見た目は眼鏡をかけ、長い髪をくくり、デキる女性だが本当はダレダレなダメ人間。拳銃の腕前、戦闘は人並み以上で公安O課らしい。ちなみに公安O課でも高い戦闘力を誇るが、元がダメなので出世はしない。ヒナタより年上であることはたしかで「アヤ姉さん」と呼ばれている。

使用拳銃はモーゼルC96とFNブローニング・ハイパワー。体術は少林拳などの中国武術。

HSS・G。オリジナルの能力です。

第四話 ヒステリア・ジーニアス

HSS・G。ヒステリア・ジーニアス。誰がつけたか知らんが皮肉な名前だ。ジーニアスの意味は天才、天分。だがこの能力は決してジーニアスと付くべきじゃない。crazyクレイジーがお似合いだ。そもそも、こんな能力持つべきでもない。

中学二年の夏。俺はとある任務を仲間と受けた。自分達のランクに見合った任務。先に結果を言う。任務は成功に終わった。

ただし、『無事に』ではない。仲間の一人が肩を撃たれ、腹を刺される重症の状態だ。

肩は容疑者に撃たれ……そして重症の一番の原因である腹を刺したのは俺だった。

俺が刺した。今思っても実感が無い。なぜなら、俺は仲間に見えられたとき、気絶していたから。

その重症を負ったことも、原因が俺のHSS・Gだと聞かされたのも、病室で俺が目覚めた時。公安0課の職員に告げられた。

実感はなくともうつすらと記憶はある。銃声が聞こえあいつが撃たれた後に目の前が真っ赤になったこと。俺がナイフを振り下ろすところ。その記憶は悪夢そのものだった。

結局、その事件は『事故』と処理され、俺は武偵中学を中退。公安0課で検査を受けた。いや、検査というか人体実験といったほうが正しいかもな。HSS・Gの危険度を測るための。

実験結果。予測測定ランクS〜R。詳細は壁をブツ壊して逃走しようとしたので不明。わかったのはHSS・G時は目が薄い灰色じゃなく紅になる、それだけのお粗末な結果だけだ。

一度録画されていた姿を見せてもらったのだが、あれはもう自分自身なのに自分ではない姿。例えるなら獣だ。しかも手に負えない

凶暴な。

あの姿はだれにも見られたくない。無差別に物を壊すことだけしか考えていない、ただの狂人。

「いつかは話す。けど、今じゃなくていいだろ？」

それはいつになるだろうか。こんな危なっかしい能力とつとと話したほうがいいってのは重々承知だ。

「うん。言いたいときに言えばいいの。……芳樹さんも姉さんもひゅう君に自由にしてほしいから」

「自由ってんなら。ここの学校入れてくれた時点で十分だけどさあまり人と親しくしない。親くなるのはランクの高い人だけ。

高校入学をするさいに俺が勝手に作った制約。そのおかげで無闇に人は話しかけなくなっただし、昔に比べたらちよいとネクラかもな。

「でもでも、今朝はちよつと自由すぎだよ。チャリジャックされてヒステリアモードにもなっっちゃうなんて」

「……ヒスったことまで確認済みかよ。」

「お相手は神崎・H・アリアちゃん」

「好きでなっただけじゃない」

あれはれっきとした事故だ。つてか、普通捲れるか制服つて。

「まあまあ、照れなさんな。でもアリアちゃんかあ。あの娘、けっこーな有名人よ」

と、一人ヒートアップしたアヤ姉さんはどこから取り出したファイルを捲っている。表紙にデカデカと貼られたマル秘マークが、俺としては気になるとこだ。これアヤ姉さんが持ってて大丈夫なものなのか。

「神崎・H・アリア。英国、ロンドン武偵校から東京武偵校に今年の上学期に留学。欧州で受けた任務は全てパーフェクト。もちろん、ランクはS」

「へえ、すげえな。ちびっこの癖に」

「ランク高いね」

ニコニコ。何が嬉しいのか、アヤ姉さんは笑顔で俺を見てくる。我関せず。ああ、関係ないね。アリアのランクが高いから何だっ
てんだ。

「Sだって。さっきの子と同じだよ」

「それが何か？」

「もうっ！ とぼけちゃってえ！」

アヤ姉さんの笑みが、ニコニコからニヤニヤへ。

ニヤニヤっていい歳をした女性がしていい笑い方かね。

「何を期待しているかわかったけど、別にアリアと仲良くなる予定はないからな」

あいつは危険だ。言動も性格も。とにかく全て。

もたれかかってきたアヤ姉さんを反対側へと押しつけ、ポケットから携帯を取り出す。

そして画面に現れた周知メールに顔をしかめた。せつかく話題を変えたところなのによ。

「あははっ、モザイクかけてないから誰がよくわかるねえ。これ遠山君？」

教務課からの周知メールには、俺とキンジが自転車をこいでいる写真が載っている。多少、ぼやけているがアヤ姉さんの言った通り、俺らだとすぐわかる写真だ。プライバシーもへったくれもねえ。

「遠山家と日水家…そしてHね…」

無然としている俺の横で、アヤ姉さんが呟きを洩らす。視線を向けると、少し目を細めてアリアの写真を見ていた。どうせ、マル秘ファイルに挟まったヤツだろうけど。

「何だよ。どういう意味？」

「んっんー、大人の呟きってヤツ。じゃ、そろそろ姉さんは行くかな」

細めた目を元に戻し、反動をつけてアヤ姉さんは立ち上がる。

「あー、ひゅう君。姉さんから大変残念なお知らせが」

「……何でしょうか？」

屋上から出る直前、クルリと振り向いたアヤ姉さんは、
「今日、急用を思い出してお泊りできないの。ゴメンね」
申し訳なさが表れていない顔でウィンクをした。

……誰がいつアヤ姉さんを泊めると言ったか。俺の住んでいると
こは男子寮。唯もそうだけど何でああも泊まりたがるんだろっかな。
男の一人暮らしなんてあんまい光景じゃない。「お泊り」なんて
女同士でやりやいいのに。

第四話 ヒステリア・ジーニアス（後書き）

ヒステリア・ジーニアス

通称「HSS・G」

遠山家にはないヒナタ特別の種類です。発生条件などは未だ不明。その能力の実態を知る者は少なく、能力のことは「奥の手」「HSS・G」と呼ばれている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7679w/>

緋弾のアリア ~ Another Story

2012年1月5日18時50分発行